

サインバスケットボール を探求する

一般社団法人B-BALLY'd(ビバリード)

代表理事 須田将広

「デフ」の定義



デフ: 一般的に、耳が聞こえない人や聴覚障がい者のことを指す。

聴覚レベルは軽度から重度に医学的に区別されている。

例) 電話ができる、日本語で発声できるデフ

例) 耳に頼らず、発声せず、手話のみで生活できるデフ

Deaf: 主に、視覚を活用した対話で社会生活をしている人を指す。

例) コーダなど、手話をメインに生活できる聴者(バイリンガル)

社会から見た思い込み

- 音声で話せるなら耳も聴こえているはずだよね。
- 聴こえなくても口は使えるから話せるよね。
- 言葉って日本語のことだよね。
- 日本語を正しく読み書きできないと社会ではやっていけないよね。
- みんな手話わからないから、音声で話せるようにしてください。

手話で生活しているデフにとっては抑圧を感じる

デフスポーツでも同じことが起きている

- とりあえず見て真似する、でいいよ。
- 試合中でもベンチを見ないと伝えられないよ。
なんで今ベンチを見るんだ、ボールを見て、走って！
- 日本語で書いてあげたのに、なんでわからないの？
- 音声のほうがこっちとしてはやりやすいんだよね。
- だれか通訳して、誰でもいいから。

手話で生活しているデフスポーツ選手は成長しにくい

手話で生きるデフは「おいてけぼり」

手話は、言語であり、法律で保護されている。

しかし、手話の中に、日本語はない。

日本語で生活する聴者の世界からは「おいてけぼり」。

日本語を使っても聞こえないから、結局は「おいてけぼり」。

私たちは、デフがおいてけぼりにならない社会の
実現を目指し、バスケットで日本を元気にします。

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



SDGsの取り組み

4 質の高い教育を
みんなに



すべての人が、視覚を活用した対話ができるようにすることで、
社会生活で「見る」ことを生かした、自分探しの生涯学習の機会を促進します。
バスケットでは、全ての選手が視覚を活用することでプレイの幅「も」広がります。

10 人や国の不平等
をなくそう



すべての人が、視覚を活用した対話ができるようにすることで、音声中心の
日本語の世界から取り残されている人々をなくし、不平等をなくしていきます。
バスケットでは、チーム内で取り残されている人がいなくなります。

16 平和と公正を
すべての人に



すべての人が、視覚を活用した対話ができるようにすることで、
社会の在り方が変わり、全ての制度が公正となり、平和が受け継がれていきます。
バスケットでは、競技ルールの在り方が発展し、より多くの人を楽しめるようになります。

バスケットボール競技を通して対話を深める

多種多様な人々がお互いに歩み寄って、
バスケットボール競技に特化した**共通言語**をつかって、
対話を深めていきます。

視覚と空間認識をフル活用した
身体言語がメイン

一般社団法人B-BALLY'd(ビバリード)は、その環境を
「サインバスケットボール」と提唱して進めてまいります。

その考え方をデフバスケットボールに取り入れて、
共に探求していきたいと考えています。

「サインバスケットボール」が目指すもの

三遠ネオフェニックスの津屋一球選手はこちらに近いです。

日本語(音声)の
環境で育った人

重なっている共通部分が、サインバスケットが目指す
多種多様な人々が織りなす
コミュニケーション環境

手話の環境で
育った人

日本語対应手話の
環境で育った人

勘違いされやすいのですが、
手話の中に日本語はありません。

目標



Deafバスケットボールを競技に昇華させ、 サインバスケットボール競技を創る

「デフバスケットボールとはデフがプレイするバスケットボール競技」では、
デフやDeafのためのルールが存在しないため、今以上の発展は望めない。
だから、**多種多様な人々が楽しめるサインバスケットボール競技** を創りたい。

Deafバスケットボールの定義を明確にする

(デフをバスケットに合わせるのではなく、バスケットをDeafに合わせる)

Deafバスケットボールを実現するために必要な材料を集め、
選手や有識者との『深い対話』と『挑戦的な探求』で定義化を進める

最終目的を達成するために必要な材料(1)

1. 視覚言語を用いた深い対話と素早い意思疎通

- ・ どのように視覚的訴求をすれば、素早い意思疎通ができるか
- ・ かつ、深い対話を経て、試合本番で実践できる方法を模索する
- ・ サインの引き出しを増やし、かつ、標準化していく
- ・ バスケットボール競技の全ての情報(コート内外)を迅速に共有できる視覚言語から、自分と他者との共通認識を生み出すサインを創る

※ 手話という視覚言語で生きてきた身体性があるって適合した「サイン」が生み出される

【補足】自分発信

- ◎自分から情報を発信する(コート全体に向けて)



最終目的を達成するために必要な材料(2)

2. 「Deafの視覚」を手に入れる

- 視覚的な情報を多く集める
- 周辺視野の変化にすぐ気づく
- 人の顔を正確に識別できる
- 映像を記憶する力がある



↑カットインのフェイクのみでなく、ディフェンスがスクリーナーをチラ見する際も狙える

表情を使ったコミュニケーション ↓

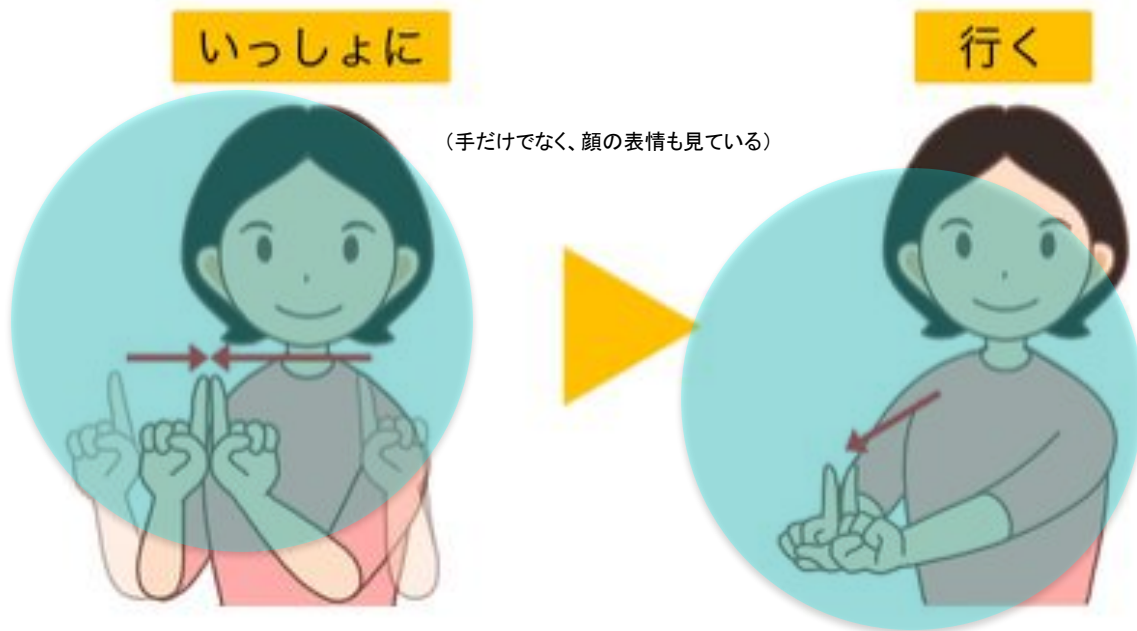


<https://note.com/matsuzakijo/n/n9abaf6c66a4c>

このように聴覚障害当事者と聴者は、同じ「目」を持っていても、「視覚」は違うのです。さらにいえば「視覚」を用いる文化も違う。ですから、それぞれの「視覚」文化を理解し、負担少なく心地よく参加できるような状況を共創することが大切になるのではない でしょうか。

【補足】手話を見るとききの視野について

- 直線ではなく、円で見るときの視野について



【補足】パスがうまい選手の視野について

○ 直線ではなく、円で見ると、全体を円で把握



↑ 直線で見ると、隣のディフェンスが見えなくなり、パスカットに弱くなる
リングや味方が視野から外れるので、次の動きに繋がりにくくなる



↑ 円で見ると、隣のディフェンスが見えるようになり、パスカットに強くなる
リングも視野に入れることで、シュートの成功率も上がる
味方の動きの予測ができるようになり、ノールックパスが狙える

【補足】「見溜め」と「対話」と「くりかえし」

① 視覚的情報を**見て溜める**。

→ 複数の視覚情報を同時に取得はできない

→ 順番に見て、情報を溜める

→ 例として、作戦盤でコマを動かし終わってから、説明をする

※ 聴者は聴覚と視覚を併用しながら情報を得ていくやり方が多い

② 溜めた内容をもって、他者と**対話**する。

③ お互いが理解するまで、**くりかえす**。

最終目的を達成するために必要な材料(3)

3. デフフッド

- Deafに「**なりたい自分**」を探す

- 他者との深い対話をするためには

- 自己肯定感を高められる

「私なんて」と思うと、「私なんて」と思っている情報しか入ってこない。
「私ならできる!」と思うと、
できるようになるための情報が入る。
→カラーバス効果

- 聴者は「デフ」になれないが、「Deaf」にはなれる

最終目的を達成するために必要な材料(4)



4. バスケ競技における化学反応を高めるための「DeafバスケIQ」

- 今起こっているシチュエーションで、どう判断して動くべきか
- そのときのコミュニケーションはどうするのか(サインで共有)
- サインは片手で表現するべき(ボールを扱う手との役割分担)
- スクリーンプレイに対する対処法など、「Deafだから」ではのアイデア
- バスケットボール競技の常識をひっくり返すアイデンティティ
- コーチと選手の間での共通認識を取る(もしくは取れたと確信する)方法

コーチからと、選手から、の両方の視点から方法を検討する

最終目的を達成するために必要な材料(5)

5. 「ワクワク」をキーワードにする

- 「**なりたい自分**」に、ワクワクしよう！
- 「やらなきゃ」という義務感よりも、ワクワクで「やりたい！」が最強
- ワクワクしながらDeafバスケットボールを楽しむが理想
- コーチも選手と一緒に幸せになると、コーチからの暴言暴力はない
- 選手が最高のパフォーマンスを発揮できる心理（心理的安全性）

恩塚監督の「成長に繋げる"ワクワク"マインドセット」に通じるのでいつかは講演を依頼したい

サインバスケットボールの定義からはじめてみる



- サインバスケットボールにおける優秀なコーチとは？
 - 多くの情報から最適解を選択できるコーチ(従来)
 - 最適解を適切な言語もしくは方法で瞬時に伝えることができるコーチ(新定義)
 - 方法の例:サイン、ロールプレイ、視覚共有順、ハンドシグナルなど(福島動画参照)
- 個別にスキルを磨いてもデフの試合では生かせない
 - 耳が聞こえない状況を生きたまま切り取って練習する方法の確立(生命論パラダイム)
 - デフと言っても聴覚障害の程度も違うし、使う言語も異なるのでどう確立するのか
- 選手が自ら成長するのを邪魔しない(指導者として最低限の倫理)
 - 環境が邪魔をしていることに気づき、改善することも指導者の役目のひとつ
 - 日本語を排除し、バスケットに必要なサインのみにするなど、思い切りのある指導者

バスケットボールからサインバスケットボールへ



- **バスケットボール競技経験のデフがサインバスケットボールを身につけるには**
 - 適切な言語もしくは方法で **周りと深い対話** ができること
 - 適切な言語もしくは方法で自分の意志を **周りに瞬時に伝えられる** こと
 - 視覚的に情報を読み取る技術(例:手話で話すときは顔と手を同時に見て判断)
- **日本代表チームを構築する**
 - 最も優先すべき練習は何か？
- **オープンスキルの中にサインをどう入れるのか**
 - 目で見えて判断する材料に、**「手」「表情」「空間」**を加える
 - 3次元(音声)から4次元(+空間)へ

スキルの変化(進化であり、退化ではない)



- **トリプル・スレットをドリブル・スレットへ**
 - トリプル・スレットはボールを両手で持ってしまう
 - ドリブル・スレットでシュート、パスをいつでも出せるようにする
- **パスは全てワンハンド(転がす意識から)**
 - 持ってしまうとバスケが止まる(ピボットしかない状況)
 - ワンハンドならパスフェイクも身につけやすい
- **肩を動かさない**
 - 肩がぶれると視野もぶれる
 - 両肩と眉間を3点で意識し柔らかく固定してドリブルすると、視野は確保しやすい

サインバスケットボールの指導例

- 肩を動かすと視点がブレてドリブルも安定しない選手への指導例
 - 両手で下図のような三角形を作り、頂点が額、底辺の両端が両肩を示す
 - これだけで一発でイメージから入ることができ、表示時間の持続性も高い



バスケットで日本を元気に！

